

旧上級武家地

阿武川と日本海が接する低地には、長州藩の上級武士が住んでいた。この地は江戸時代の建築物の宝庫である。

自然災害や都市開発によって日本の歴史的遺産が失われることはなく、白壁や狭い通りは、長州藩主・毛利氏に仕えていた時代の面影を色濃く残している。

関ヶ原の戦い（1600年）に敗れた毛利家は戦勝した徳川に領土の半分以上を明け渡され、江戸の都から遠く離れた日本海側の小さな漁村、萩に都を移した。2本の川に挟まれた城下町は、低地の砂地の三角州に築かれた。萩城は、西の川の河口にある小高い丘、静木山の麓に海を背にして築かれた。町全体の計画が事前に練られ、内堀と外堀の間に武家屋敷が戦略的に配置された。萩湾と萩城の南側、橋本川の北側、阿武川の西側にあった武家屋敷は萩城の第一の防衛線となっていた。陸から攻めてくる敵は、川を渡り、いくつかの堀を渡り、迷路のように入り組んだ街並みの中で戦わなければならなかった。

こ武家屋敷が、城や大名に近いことは当時の社会階層を反映している。階層は職業によって分けられていた：階層のトップに武士、続いて農民、職人、商人の順になっていた。社会階層が高いほど、城に近いところに住むことが許されていた。

現在、白壁が美しく保存されているこの地区は、日本の歴史に思いを馳せながら散策することができる。

旧住居地区は、1976年に国の重要伝統的建造物群保存地区に指定され、商家街とともに、ユネスコの世界遺産「日本の明治産業革命遺産」に登録された萩城下町として知られるエリアを構成している。